

ニコス・カザンザキス

『グレコへの報告』(三)

小学校、祖父の死

藤下 幸子 訳

現代ギリシア語教室エリニカ

小学校

相変わらず魔法の目と蜂蜜とミツバチで一杯の、とても騒々しい心を持ち、頭には羊毛の赤い縁なし帽を被り、足には赤い房の付いた伝統的な靴を履き、父に手を引かれ、半ばわくわく、半ばびくびくしながら、ある朝私は家を出た。母は匂いを嗅ぐと勇気がでるから、と言って

バジルの小枝を私に手渡し、洗礼の時の小さな金の十字架を私の首にかけ、誇らしげに私を見つめて呟いた。
「神様のご加護と私の祝福と共に……」

私は過剰に飾りたてられた小さな生贄の動物のようで、心の内では誇らしさと同時に恐怖を感じていた。けれども、手は父の手のひらの中にすっぽり握り締められていたので、私は勇気づけられていった。かなり歩いて狭い路地を通り、聖ミナス教会に辿り着いた。そこを曲がって広い中庭のある古い建物に入った。庭の四隅には大きな部屋があり、真ん中には埃を被ったようなプラタナスの木があった。私はためらい、立ち止まった。怖じ気付いた。私の手は温かい大きな手のひらの中で震え始めた。

父は身を屈めて私の髪に触れ、撫でてくれた。

私は吃驚して跳び上がった。父に撫でられた記憶は一切無かった。私は怯え、父を見上げた。父は私が怯えているのが分かって、手を引つめて言った。

「お前はここで読み書きを学んで、人間になるのだよ。十字を切りなさい」

先生が玄関口に現れた。手には細長い鞭を持っていた。私には大きな歯をした野蠻人に見え、角が生えているか

どうか見ようと、頭のとっぺんに目を凝らした。だが見えなかった。帽子を被っていたから。

「こいつが私の息子です」と、父は先生に言った。

父は手から私の手を解いて、私を先生に渡して言った。

「肉はあなたのもの、骨は私のもの。容赦はご無用です。こいつをぶん殴って、人間にしてやってください」

「ご心配なく、ミハリス隊長^三。私は彼らを人間にする道具をここに持っています」先生はそう言って鞭を見せた。

小学校に於ける私の記憶の中に、今も多くの子供たちの頭が残っている。髑髏のように隣同士くっ付き合っているのほとんどは、もう髑髏になってしまっているだろう。だが、これらの頭以上に生き活きと、四人の不死の先生が私の内に残っている。

一年生の時のパテロプロス先生は、老人で背が低く、獐猛な目と垂れ下がった口髭の持ち主で、いつも鞭を手にしていた。私たちを追い立て、寄せ集め、一列に並べた。まるで私たちがアヒルのヒナであり、私たちを売りにバザールに連れて行くかのようなだった。親はそれぞれ、野生の子ヤギのような自分の子を、先生に手渡しな

がらこう注文した。《肉はあなたのもの、骨は私のもの、先生、人間になるまで思いっきりぶん殴ってやって下さい》そして先生は容赦なく私たちをぶん殴った。私たちは一杯ぶん殴られ、いつになったら人間になれるのだろうかと、先生と生徒たち全員が待っていた。大人になって博愛的な理論が私の精神を墮落させ始めた時、最初の先生のこの方法を私は野蠻と名付けた。しかし、人間の本性を更によく知るにつれ、私はパテロプロス先生の聖なる鞭を祝福するようになった。苦しみが動物から人間へ導く上り坂での最も偉大な先導者であるということを、この鞭が私たちに教えてくれたから。

ティティロス先生は二年生のクラスに君臨していた。気の毒なことに、君臨してはいたが統治してはいなかった。顔色が悪く、眼鏡をかけ、糊の利いたシャツを着て、先の尖った踵きそうなエナメルの靴を履き、大きな鼻には毛が生え、ほっそりとした指は煙草で黄色くなっていた。本名はティティロスではなくパバダキスだった。だが、ある日、司祭である彼の父親が、村から大きなチーゾの塊を手土産に持ってきた。その時、息子が《お父さん、これ、ティティロス（何チーゾ）^三？》と尋ねた。

たまたま家に居た近所の女性がそれを聞き、他の人たちに言いふらした。気の毒にも先生をからかつて、そんな綽名を付けたのだった。

ところで、我がティティロス先生は、殴るところか懇願するのだった。ロビンソン・クルーソーを私たちに読んで単語の意味を説明してくれ、それから優しく不安げに私たちを見つめていた。私たちに、理解してくれるようにと懇願しているようだった。けれども、私たちは本のページをパラパラめくり、粗末な印刷の絵の中の、熱帯雨林、分厚い葉の木々、草で編んだ幅広の帽子を被ったロビンソン、周りに人影のない果てしない海などを、うつとりと眺めていた。気の毒なティティロス先生は煙草入れを取り出し、休憩時間に吸おうと煙草を巻いて、懇願するように私たちを見つめて待っていた。

ある日、『聖書物語』を学んでいた時、一皿のレンズマメの為に自分のプロトキア（長子相続権）をヤコブに売ったエサウ^四の話になった。昼に家へ帰る道でプロトキアとは何かと父に尋ねた。父は咳払いをして頭を掻いた。

「お前の叔父さんのニコラキス呼びに行きなさい」
この叔父は母の兄弟で小学校を卒業していて、家族の

中では一番学識があった。とても小柄で、禿げ頭で、大きな目は怯えたようで、巨大な手は毛むくじやらだった。親戚の内ではより良い家柄の出の、血色が悪く意地も悪い女性と結婚したが、彼女は彼を嫉妬し、見下してもいた。彼が夜中に起き出して階下に降りて行かないように、毎晩彼の脚をベッドの支柱に縄で縛りつけていた。階下では胸の大きな丸ぼちやの召使の女が寝ていた。朝になると妻は紐を解いてやった。哀れな叔父はこの受難を五年間耐え忍んだが、神が恩寵を垂れ給うた——それ故、いと心優しき神とも言われている——意地悪女は死に、今度は下品な言葉を使うが、健康で気立ての良い村娘と結婚した。彼女は夫を縛ることはなかった。叔父は上機嫌で家にやって来て母に会った。

「ニコラキス、新しい奥さんと今度はどう過ごしてるの？」と母は叔父に尋ねた。

「マルギ、どれほど俺は幸せか、訊くまでもないよ！俺を縛らないんだ」と叔父は答えた。

彼は父を恐れていた。顔を上げて目を合わせることはなく、毛むくじやらの手を揉みながら、始終外門を見つめていた。今日は父に呼ばれていると聞くや否や、口に食べ物を頬張ったまま食卓から立ち上がり、我が家に走

つて来た。

《ドラゴンには俺にまた一体何の用が？ 哀れな俺の姉はどうやって彼に耐えているのや！》と考え、いらいらしながら最後の一口を呑み込み、最初の妻を思い出して、満足げに微笑んだ。《お陰さんで、俺は助かった》

「こっちへ来てくれ。お前は教育を受けたんだから、教えてくれ！」と父は彼を見るなり言った。

二人とも本の上に身を乗り出し、言い合った。

「プロトトキアは狩りの衣装という意味だろ」父は随分考えた挙句そう言った。

「それは銃という意味だと思いますが」と叔父は首を振って反論したが声は震えていた。

「狩りの衣装だ！」と父は怒鳴った。

叔父は眉をしかめ、押し黙った。

翌日、先生が尋ねた。

「プロトトキアはどういう意味かね？」

私はさつと立ち上がった。

「狩りの衣装です。」

「何と愚かな……。どこの文盲が君にそう教えたのかね？」

「私の父です！」

先生は尻込みした。彼も父を恐れていた。どうして異議など唱えられよう！

「そう、勿論、時には……とても稀だが……狩りの衣装という意味だ。だが、この場合は……」と言葉を濁らせた。

私は全ての課目の内で、『聖書物語』が一番好きだった。不可思議で複雑怪奇な暗いおとぎ話で、言葉を話す蛇、大洪水と虹、窃盗や殺人の話、兄が自分の弟を殺そうとしたり、父親が自分の一人息子を惨殺しようとしたり、その都度、神が中に割って入るが、その神もまた殺しをしたり、足の裏を濡らさずに人々が海を渡ったり……。私たちには理解出来なかった。先生に尋ねると、先生は鞭を振り上げ、咳払いをし、怒って叫んだ。

「生意気だ！ 君たちには何回言ったら良いのか？ 話し合いは要らない！」

「でも、先生、僕たちは分からないんです」と泣き声で言った。

「それらは神がなさることだ。我々が分かつてはならないのだ。それは罪だ」と先生は答えた。

それは罪だ！ この恐ろしい言葉を聞いて私たちは震え上がった。それは言葉ではなく、エバを誘惑した蛇で、

教壇から下りて来て私たちを食べようと口を開けていた。私たちは学習机で縮こまり、息を凝らしていた。

初めて聞いた時に私をぞつとさせたもう一つの言葉がある。アブラアム^五という言葉だ。この二つの「ア、ア」と言う音が私の内で反響した。とても遠くの深くで暗く危険な井戸から聞こえて来たように。

私が心の中で密かに《アブラ・アム、アブラ・アム》と呟くと、私の後ろで足音とあえぐ息が聞こえ、大きな裸足の誰かが私を追いかけてきた。そして、彼アブラアムがある日、息子を捕まえて惨殺しようとした^六ということを学んだ時、私は恐怖に捉われた。子供たちを殺す者が彼であったことを確信し、見つかつて捕まらないように、学習机の背もたれの後ろに隠れた。更に神の訓令に従う者はアブラアムの懐に入るのだと先生が私たちに言った時、全ての訓令を破ろうと心の内で誓った。アブラアムの懐から逃れるために。

同じ授業で、アヴァクム^七という言葉を初めて聞いた時も、同じような動揺を感じた。この言葉も同様に私には重苦しく、夜の帳が下りる度ごとに家の中庭で待ち伏せをしている鬼のように感じられた。私はそれがどこに潜んでいるかを知っていた。それは井戸の後ろだった。

そして一度、大胆にも一人で中庭に出たある夜のこと、それが井戸から跳び出て手を伸ばし、私に《アヴァクム！》と叫んだ。それは、《動くな、お前を喰ってやる！》と言う意味である。

いくつかの言葉の音が私に大きな動揺を起こさせた。それは喜びではなく、しばしば恐怖であった。そして全ての言葉のうちでヘブライの言葉がそうだった。言うのも、聖金曜日^八にはヘブライ人たちはキリスト教徒の娘たちを捕まえては、釘の出た桶に投げ込み、その血を飲むのだと祖母から聞いて知っていたから。そして旧約聖書の中のある言葉——取り分け《エホバ》という言葉——が、しばしば釘の出た桶を想起させ、その中に私を投げ込もうと望んでいるのだと思っていた。

三年生の時は、ペリアンドロス^九・クラサキス先生だった。どこの心ない名付け親が、この病弱で凡庸な人にコリントスの獐猛な僭主の名前を与えたのだろうか？ 彼は首の皺が見えないように高くて堅い襟のシャツを着ていた。脚は蟬のように華奢で、白いハンカチをいつも口に当て、何度も唾を吐き、息を抑えていた。潔癖癖があり、毎日私たちの手や、耳や、鼻や、歯や、爪を詳しく

調べた。ぶん殴ることも懇願することもしなかったが、吹き出物だらけの大頭を振って私たちに怒鳴り散らしていた。

「畜生め、豚め、毎日石鹸で手を洗わなければ、お前たちは決して人間にはならないのだ。人間とは、すなわち何を意味するか？ 石鹸で体を洗うものことだ。頭腦だけでは十分ではない、馬鹿者め、石鹸も必要なのだ。そんな手をしてどうして神の御前に立つことが出来るのか？ 校庭に出て行って手を洗いなさい！」と。

どの母音が長母音なのか、どれが短母音なのか、どのアクセント記号をつけるべきか、鋭アクセントなのか曲アクセントなのか、を長時間聞かされた。私たちはと言えば、通りの声を聞いていた。八百屋やクルーリ売りの声、ロバの嘶き、近所の女たちの笑い声……。そして、いつチャイムが鳴って解放されるかを待っていた。先生が教壇の上で汗をかきながら、何度も繰り返して言い、私たちの頭に文法を叩き込もうとしているのをじっと見ていた。けれども、私たちの心は外の太陽の下、石投げ合戦の下にあった。何故なら私たちは石投げ合戦がとてよかったから。それでしばしば傷だらけの頭で学校に行ったものだった。

素晴らしく晴れ渡った春の日、開かれた窓から向かいの家の満開のマンダリンオレンジの花の香が漂ってきた。私たちの心も花咲く蜜柑の木になり、もはや鋭アクセントや曲アクセントについて聞くことに堪えられなかった。丁度その時、一羽の小鳥が校庭のプラタナスの木に止まって轉っていた。その時、今年、村から転校してきたニコリオという顔色の悪い赤毛の生徒が、もはや耐えきれずに指を上げて叫んだ。

「先生、黙ってください！ 黙って、鳥の囀りを聞きましよう！」

気の毒なベリアンドロス・クラサキス先生！ ある日、私たちは彼を埋葬した。先生は教卓に頭を静かに凭せ掛け、魚のように一瞬もがき、息を引き取った。私たちは目前に死を見て恐怖に捉えられ、金切り声を上げながら校庭に飛び出した。翌日、私たちはよそ行きの服を着て、手をしっかりと洗った。彼の好意を無下にしないようにと。そして海辺の古い共同墓地に彼を運んで行った。時は春。天空は笑い、大地はカモミールの花で匂っていた。棺には覆いが無く、死者の顔は口を開いた吹き出物だらけで緑色や黄色になっていた。私たちは生徒が一人ずつ身を屈めて死者にお別れのキスをした時、もはや春はカモミ―

ルの匂いはせず、腐っていく肉の臭いがしていた。

四年生の時は、校長先生が君臨し統治もしていた。ずんぐりむっくりの体形、楔形の顎鬚、いつも怒っている灰色の目、蟹股であつた。《おい、見てみろ、先生の脚、おい、見えないか、どんなに脚が縛れているか？ どんなに咳をしているか？ クレタ人ではないよ》私たちは聞かれないように、お互いにひそひそと言ひ合つていた。大学を出た先生が私たちのために、ネア・ペダゴギキ（新しい教育学）⁺を伴つてアテネから来られた、と言うことだつた。私たちはペダゴギキというのは若い女性の名前だと思つていた。だが、初めて対面した時、彼は全く一人だつた。ペダゴギキさんは居なかつた。恐らく家に居たのだろう。先生は、ねじれた小さな鞭を持つて、我々を一列に並ばせ、演説を始めた。私たちが学ぶことは何でも見たり、触れたり、あるいは、点が一杯の紙⁺の上に描いたりしなければならぬ。十分に気をつけるように。悪戯はいけない。休憩時間に笑つたり、大声を上げたりしてはいけない。両手を組んでいるように。道で司祭さんに出会つた時は手にキスをするように、ということだつた。

「よく気を付けろ、さもないと痛い目にあうぞ、こちらを見ろ！ 言葉は要らない。行為を見るのだ！」と言つて私たちに鞭を見せた。

そして実際私たちは見た。私たちが何か悪戯をしたり、先生の機嫌が悪かつたりした時、私たちのズボンのボタンを外してズボンを下ろし、素肌に直に鞭を打つた。ボタンを外すのが面倒臭くなつた時は、血が出るまで私たちの耳に鞭打つた。

ある日、私は腹をくくつて指を上げた。

「先生、ネア・ペダゴギキさんはどこにおられるのですか？ どうして学校に来られないのですか？」と尋ねた。先生は急に教卓から立ち上がり、鞭を壁から外して叫んだ。

「生意気な奴め、こつちへ来い。ズボンのボタンを外せ」彼は自分でズボンのボタンを外すのが面倒だつたのだ。「これでもか！ これでもか！」と鞭を打ち呻き始めた。汗をかき、打つのを止めて言つた。

「見ろ、これがネア・ペダゴギキだ。二度と言うな！」しかし、ネア・ペダゴギキさんの夫はずる賢くもあつた。ある日、私たちに言つた。《明日、お前たちにクリストファー・コロンブスについて、どのようにしてアメリ

カ大陸を発見したか話してあげよう。だがお前たちがよく理解するように、各自一個ずつ卵を持ってきなさい。卵を持ってない者はバターを持ってきなさい!」

彼にはテルプシホリという年頃の娘もいた。小柄だがとても魅力的で、多くの人たちが求婚した。だが、彼は結婚させようとしなかった。《我が家では、このような恥ずべきことを私が許さん!》と言ったものだ。そして、一月に猫たちが瓦屋根に上がり、ニャアニャア鳴くと、彼は梯子を持って来て屋根に上り、猫たちを追ひ払った。《罰当たりな本性め、こん畜生、素行が悪い》とぶつぶつ言っていた。

聖金曜日には、十字架刑のキリストを礼拝するために先生は私たちを教会に連れて行った。その後、私たちを学校に連れ戻し、何を見たか、誰に礼拝したか、そして十字架刑とは何かを説明した。私たちは学習机に整列させられたが、とても疲れてうんざりしていた。と言うのも、キリストの苦しみを私たちは体験するために、その日は酸っぱいレモンしか食べておらず、酔しか飲んでいなかったから。それからネア・ペダゴギさんの夫は重々しい厳かな声で、神がどのように地上に降臨しキリストになったか、私たちを罪から救うためにどのようにに受難

し十字架にかけられたかを、私たちに説明し始めた。どんな罪? 私たちは殆ど理解できなかったが、十二名の使徒がいて、そのうちの一人、ユダがキリストを裏切ったことは良く分かった。

「それで、ユダは誰のようだったか? 誰のようかな?」先生は教卓から立ち上がり、机から机へとゆつくりと脅すように進み、一人一人を見詰めていった。

「ユダは、この子のようかな……この子のようかな……」人差し指を伸ばして一人ずつ指差していった。ユダが私たちのうちの誰に一番似ているかを見付けようとしながら。私たちは縮こまって、その恐ろしい指が自分の上に止まったりしないかと震えていた。突然、先生は大声で叫んだ。そして彼の指が、顔色の悪い、貧しい身なりの、美しい赤みがあった金髪の少年の上に止まった。それは去年、三年生の時に《先生、黙って下さい! 黙って、鳥の声を聞きましょう》と叫んだニコリオだった。

「ほら、ニコリオみたいだ。そっくりだ。こんな風に顔色が悪く、こんな身なりで、赤い髪だった。真つ赤だった、地獄の炎のよう!」と先生は叫んだ。

それを聞き、哀れなニコリオは号泣した。そして危険から逃れた私たち全員は、憎しみで呪うように彼を見つ

め、外に出た時にはキリストを裏切った彼を叩きのめそうと、机から机へと密かに合意した。

先生はネア・ペダゴギキの指示通りに、ユダがどんな風であつたかを、このように具体的に私たちに示したことに満足し、私たちを帰宅させた。私たちは真ん中にニコリオを引っぱりだし、通りに出るや否や、彼に唾を吐きかけぶん殴り始めた。ニコリオは泣きながら逃げたが、私たちは石を投げて追いかけて、彼が家に着いて中にもぐり込むまで、《ユダ！ ユダ！》とやじり倒した。

ニコリオは教室には二度と姿を現さなかったし、学校にも二度と足を踏み入れなかった。私は三十年後に西欧諸国から実家に帰ったが、聖土曜日^{十二}に戸を叩く音がして玄関に赤毛で赤髭の顔色が悪く痩せた男が現れた。その男は父が復活祭にと家族全員の為に注文した新しい靴を色柄のスカーフに入れて持ってきた。おずおずしながら玄関に立ち、私を見て首を振った。

「私が誰か分かりませんか？私を覚えてないですか？」と尋ねた。

彼がそう言うや否や、誰だか分かった。

「ニコリオだ！」と叫び、私は彼を抱きしめた。

「ユダです……」と彼は言つて辛そうに微笑んだ。

度々、近隣の男や女たちの事を思い出してはゾツとする。ほとんどの人は半ば正気ではなく異常であり、私は彼らの門の前を大急ぎで通り過ぎたものだった。何故なら怖かったから。彼らの頭脳は毀れてしまつていた。それは家の四方の壁に一年中閉じ込められ、不穏な感情に支配されていたせいなのか、トルコ人への恐怖のせいなのか、日々危険にさらされていた生活や物価そして彼らの財産についての心配のせいなのか。彼らは殺戮や戦争やキリスト教徒たちの受難について、老人たちが話すのを既に聞いていて、身の毛がよだつ思いだった。誰かが彼らの家の前を通り、立ち止まったりすると、ギョツとして跳び上がった。夜は、どうして寝ることなんて出来ただろうか！目をパッチリ開けたまま、耳をそばだてたまま、確実に訪れる不幸な時を待つていたのだ。

実際、近隣の男や女たちを思い出すと恐ろしくなる。私たちの家の少し下の方に住んでいたビクトリアさんは留まることのない優しいおしやべりで愛想よく挨拶する時もあれば、面前で戸をびしやりと閉め、戸の後ろで悪態をつき始める時もあった。

彼女の向かいのピネロピさんは、太つて、脂ぎつて老

いていたが、口がいい匂いをするようにと言って、いつも丁子を噛んで、くすぐられているかのように笑ってばかりいた。彼女の夫のデイミトウロスさんは、憂鬱症で無口だった。時々、傘をひつ掴んで山に向かった。二、三カ月後には、ぼろのようになり、だぶだぶのズボンで、餓死寸前で、傘をさして戻って来た。ピネロピさんは遠くに夫の姿が突然現れるのを見て、ワツと嗤った。《ズボンの中味を一杯にする為にまた帰って来たよ》と近所の女たちに叫んで、笑い転げていた。

更にその下の方に、マヌスさんがいた。真面目な商人だが、妄想癖があった。朝、家を出る度にチョークを持って戸に十字を印した。お昼に食事に帰った時、規則正しく、いつも同じ時間に、妹をぶん殴った。彼女の叫び声を聞くとお昼だと分かり、私たちは食卓についた。マヌスさんは、口を開いて「おはようございます」と、言うことはなかった。怒ったように怯えたように人を見つめていた。

少し上の方、道の始まりの処に、アンドレアス・パスバトゥリスさんが大きな家に住んでいた。お金持ちで、あばた面で、肉厚の鼻、子牛のような幅広い鼻孔をしていた。戸を閉めるごとにじっと立ち、開けたままではな

いかと一時間戸をまさぐった。盗人や火事や病気を追い出そうと、悪魔祓いの言葉を呟き、最後には三度十字を切り、度々後ろを振り向きながら出かけて行った。近所の子供たちは、彼がいつも決まった石の上を踏んで歩くことに目を付け、からかつてやろうと、それらの石の上に泥や馬糞を盛り上げた。すると、彼は杖でそれらを脇に寄せ、その石の上を踏んで行ったものだった。

更にもう一人の隣人、地域の自慢の種である、非常に優秀なペリクリスさんがいた。パリから最近派遣された医者で、金髪の美しい人で金縁の眼鏡をかけていた。ミラボー^{十三}を被っていたが、それはメガロ・カストロ^{十四}に上陸した最初のミラボーに違いなかった。また足が浮腫んでいるからと言って、患者のところにはスリッパで行った。そのスリッパはオールドミスである彼の姉が刺繍したものだった。彼女は彼が大学で勉強するためにブリカ^{十五}を全て費やしていた。彼は我が家の家庭医だった。私は身を屈めてスリッパの上に絹で刺繍されたバラとその周りの緑の葉を、うつとりと眺めた。ある日、私が熱を出し診察に来てくれた時、もし私が回復するのを望まれるなら、そのスリッパをくれるようにお願いした。すると彼は、あざ笑ったりするどころか大真面目で、大き

さが合うかどうか私に履かせた。だが、大きすぎた。自分の気持ちを癒すため、それがいい匂いがするかどうかを知ろうと、刺繍のバラの花の上に鼻を押し付けた。しかしバラの香りはしなかった。

笑いと涙なくしては、隣人たちを思い起こすことが出来ない。当時、人々はダースまとめて同じ型に流し込まれることはなかった。各自がそれぞれ独自の風変りな世界に生きていた。他の人とは違ったふうに笑ったり話したりしていた。家に閉じ籠り、羞恥心から、或いは恐怖心から、最も密やかな願望は隠し持っていた。そして、それらの願望は、その人の内で大きく膨れ上がり、その人を窒息させた。しかし他言することは無く、その人生には悲劇的な厳肅さがあつた。そしてさらに貧しさがあつた。貧困であるばかりでなく、誰にもそれを知られないようにという自尊心もあつた。外に出て継ぎだらけの服を見られないように、パンとオリーブの実とクロガラシを常食としていた。

いつだったか、或る隣人が言っているのを聞いた。《貧乏人というのは貧困を恐れている人のことだ。私は貧困を恐れない》と。

祖父の死

羊飼いが村から飛ぶように走って来て、私を祖父の処に連れて行ったのは、私が未だ小学生の時だったろう。祖父は臨終を迎えていて、私に祝福を与えたいので来て欲しいと言ふことだった。私は覚えてる。それは猛暑の八月のことだった。私はロバに乗って行き、その後ろで羊飼いが先端に釘を付けた二又の棒を持って、時々それをロバに突き刺していた。ロバは血を流し、痛がつて足を蹴り上げながら走っていた。私は荷運び人の方を振り返って懇願した。

「ロバが可哀そうだと思わないの？ 憐れんでやってよ。痛がつてるよ」

「痛みを感じるのは人間だけ。ロバはロバだ」と彼は私に答えた。

だが、すぐに私はロバの痛みを忘れてしまった。というのは、今やぶどう畑やオリーブ畑を通り、蟬の聲が耳をつんざいていたから。女たちはいまだにぶどうを摘み取り、干しぶどうにするために、ぶどう干場にそれらを広げていた。辺りにはいい香りが漂っていた。ぶどうを摘んでいた女が私たちを見て笑った。

「キリアコス、どうしてあの人は笑つてるの？」と、そ

の時までに名前を知った荷運び人に尋ねた。

「くすぐられて、笑ってるんだ」と答えて彼は唾を吐いた。

「誰がくすぐってるの、キリアコス？」

「悪霊たちだよ」

私には理解出来なかった。だが、怖くなった。早くそこを通り過ぎるように、悪霊を見ないようにと目を閉じて、拳骨でロバを殴った。

私たちが通ったある村では、半裸で毛むくじやらの大男たちが、ぶどう踏み場でぶどうを踏み、踊ったり、冗談を言ったりして大笑いをしていた。大地はムーストス^{十六}の香りがしていた。女たちは窯からパンを取り出し、大は吠え、スズメバチやミツバチの羽音がしていた。太陽は傾き、真つ赤になって沈もうとしていた。太陽もまたすっかり酔って、ぶどうを踏んでいるようだった。私も笑い始めた。口笛を吹きながら羊飼いかから二股の棒を取り、私もまたロバの尻に釘を突き刺し、ロバを血まみれにし始めた。

私は、疲れや太陽や蟬の声で眩暈がしていたので、祖父の家に着いて中庭の真ん中に祖父が横たわり、彼の子供や孫たちが取り囲んでいるのを見てほっとした。とい

うのは、もはや日が暮れ、辺りは涼しくなっていて、祖父は目を閉じ、私に気付かなかったから。こうして彼の大きな手を逃れることが出来た。その手で触れられると、私の肌が赤く爛れたものだった。

「眠いよ」と、私をロバから抱き下ろしてくれた女の人に言った。

「辛抱しなさい。今にもお爺様が亡くなられるのだから。彼の傍にいなさい。先ずあなたに祝福を与えてくださるように」とその人は私に言った。

私が随分遠くから貰いにやって来たこの祝福とやらは、奇跡を起こす贈り物、高価なおもちゃだと私は想像していた。それはおとぎ話が言うところの一本のドラゴンの毛に違いなかった。それをお守りとして持っていて、必要に迫られた時、それを燃やすとドラゴンが助けに来てくれるのだ。それで、祖父が目を開いてその毛をくれるのを待った。

その瞬間、祖父は大声を上げ、家族が敷いてくれていた羊の毛皮の上で体を丸めた。

「彼の守護天使を見なさったんだよ。間もなく魂を引き渡すだろうよ」と老女が言った。

彼女は十字を切り、蝋燭を一本取ってそれを息で温め、

指で十字に形作り、死者の唇を塞ごうとした。

息子たち内で真つ黒な髭をした者が立ち上がって中に入り、手に持っていたザクロを祖父の手のひらに置いた。それを冥界に持って行くようにと。

私たちは皆、近寄って祖父を見つめた。一人の女が大声で挽歌あげようとした。が、棘状の髭をした息子が彼女の口を塞いだ。

「黙ってくれ！」

祖父は目を開き、目くばせをした。皆はずっと近くに寄った。輪の最前列に息子たちが、その後ろに男の孫たちが、もつと後ろに娘たちや嫁たちが並んだ。老人は両手を差し伸べた。老女が彼の首筋の後ろに枕を置いた。老人の声が聞こえた。

「皆さん、さようなら。自分のパンは食べてしまったので、逝くよ。中庭を子供や孫で一杯にした。私の瓶を油と蜂蜜で満たした。私の樽をぶどう酒で満たした。思い残すことは無いよ。さようなら」と言った。

祖父は手を振って別れの挨拶をし、ゆっくりと視線を巡らし、一人ひとり全員に目を止めた。私は祝福のことを忘れて二、三人の従弟の後ろに隠れていたので、祖父の目に止まらなかった。誰も話をしなかった。老人は再

び口を開いた。

「皆さん、しつかり聞きなさい。私の最後の指図を聞きなさい。牛や羊やロバなどの家畜のことを、いつも気にかけていなさい。毛皮を纏った話すことが出来ない生き物にしか過ぎない、と思つてはいけないよ。それらも心を持つている。彼らも人間だ。大昔の人間なのだ。彼らに食べるものを与えなさい。オリーブの木やぶどうの木のことにも気にかけていなさい。果実を実らせることを望むなら、肥をやり、水をやり、剪定をしなさい。それらもまた大昔の人間だ。非常に大昔の者なので、覚えていないだけだ。しかし人間は覚えている。だから勿論、人間なのだ。聞いているか？ 一体、私は耳の不自由な者に話しているのだろうか？」

「聞いていますよ、お爺さん、聞いていますよ」何人かの声が応えた。

老人は大きな手を差し伸べて、長男を呼び寄せた。

「あのな、コスタンデイス！」

大男で、ゴマ塩髭で、巻き毛で大きな丸い目をしたコスタンデイスが父の手に触れた。

「はい、ここにあります。お父上。ご命令は何でしょうか？」

「私は小さな瓶に選り抜きの小麦を入れている。私のコ
リバ^{ナセ}のために長らく保管してきた。ニアメラ^{ナハ}の日に
それを茹でて、それにアーモンドをたっぷり入れなさい。
お蔭さんで十分あるのだから。それから砂糖をケチって
はいけない。お前がいつもやるようにな。お前はしまり
屋だ。信用できん」

「お言葉はもつともです」長男は大頭を振りながら答え
た。「お言葉はもつともですがね、お父上。しかし、他の
者たちも出費に加わって貰いたいですな。全部ひつくる
めて全員が出費に加わらないと。コリバはこれだけ、出
費はこれだけ、冗談ではない。そしてその上、蠟燭代、
司祭へのお布施、それからもちろん墓堀人への支払い、
それから、マカリア^ナ、前菜やぶどう酒を伴ったネクロ
トラペゾ^ニ、女たちが飲むコーヒーも加えると……言っ
ておくが、大変な出費になる。冗談ではない。皆で分け
合おう」

右や左にいる兄弟たちの方を向いた。

「みんな、聞いているか？みんなそれぞれに出費を分担す
るんだぞ。これで決まりだ」

息子たちは、ぼそぼそ呟いた。その内の一人が声を上
げた。

「わかったよ。コスダンデイス、わかったよ。喧嘩はよ
そう」

私は一列目に潜り込んでいた。すでにお話したのでご
存じのように、死はいつも奇妙で不可思議なものであり、
私は心惹かれて、私の母の父が死ぬのをそばで見ようと
近寄った。

祖父は私に目を止めた。

「ようこそ、よう来てくれた、カストロの坊や、祝福を
上げるから身を屈めなさい」と言った。

蠟燭を手にもって形作った老女が私の頭に手のひらを
当てて下に下げた。私の頭蓋骨の上方に大きな手の重み
を感じた。

「私の祝福を受けなさい、カストロの孫よ。いつか人間
になるように」と言った。

もつと他の事も言おうと唇を動かしたが、もうすつか
りと疲れ切って、目を閉じた。

「太陽はどの方向に沈むのかね？ その方に私を向けて
くれ」と今はの時の声で言った。

二人の息子が彼の体を持ち上げて、西の方に向けた。

「さようなら、逝くよ」と祖父は呟いた。

祖父は深い吐息をつき、足を延ばし、頭は枕から転げ

落ちて中庭の石にぶつめた。

「死んだの？」と私は従弟の一人に尋ねた。

「うーん、じいちゃんは逝ってしもうた。さ、食事をしに行こう」と答えた。

【註】

本訳は Nikou Καζαντζάκη ΑΝΑΦΟΡΑ ΣΤΟΝ ΓΚΡΕΚΟ, 一九八二年版 Εκδόσεις Ελένης Ν. Καζαντζάκη, Αθήνα を底本とし、Δημοτικό Σχολαίο, Ο θάνατος του παππού の章を訳したものである。

一 聖ミナス：(二八五頃～三〇九頃)エジプトの兵士であつたが、後にフリギアの修道士となる。ディオクレティアヌス帝の時に殉教。一九世紀にトルコ支配下に於いてイラクリオの守護聖人となった。

二 ミハリス隊長：カザンザキスの父はミハリス隊長と呼ばれていた。

三 ティティロス (Τι τυρός)：「何のチーズ」の意味。チーズは庶民が普通に使っている口語では τυρί (ティリ)であるが、τυρός (ティロス)は古典ギリシア語や現代純

正語(文語)で、日常会話に τυρός (ティロス)を使うと滑稽な感じがした。

四 ヤコブとエサウ：旧約聖書「創世記」(二十五章—三十六書)父イサクと母リベカとの間に生まれた双子の兄弟。兄のエサウは長子相続権を弟に奪われ殺そうとする。

五 アブラアム (Αβραάμ)：アブラハムのこと。「アブラ・アム」(Αβρα-άμ)と途中で切ると Α (α)が続く。

六 息子を…惨殺：…旧約聖書「創世記」二十二章一節—十九節。「イサクの燔祭」。

七 アヴァクム：旧約聖書に登場するイスラエルの預言者。

八 聖金曜日：復活祭の前の金曜日

九 ペリアンドロス：(前六六八—前五八四)コリントの二代目僭主。有能な行政によつてコリントを古代ギリシアで最も豊かな都市国家の一つとした。残忍で暴力的であつたとも、不正を排除して富を市民に公平に分配したとも書かれている。七賢人の一人とする説もある。

十 ネア・ヘダゴギキ (Νέα Ηεδαγωγική)：「Παιδαγωγική」は女性名詞で女性の名前として捉えてしまっている。「Νέα」は「新しい」にも「若い」にも使用される形容詞。

十一 点が一杯の紙…ドット罫線のようなノートと思われる。

十二 聖土曜日…復活祭の前の土曜日

十三 ミラボー…男性用の帽子。フランス革命初期の中心人物のミラボー伯爵の名に因む。

十四 メガロ・カストロ…現在のイラクリオ

十五 プリカ…新婦の家庭から新郎に贈られる動産と不動産の総称。

十六 ムーストス…醗酵前のぶどう液でぶどう酒の原料。

十七 コリバ…砂糖、干しぶどう、ザクロやその他の香料を入れて茹でた小麦。ムニモシノ（死者を鎮魂するため定期的に繰り返される祈り）の間、盆に盛られて供えられ、死者の冥福を祈るために参列者に供される。

十八 ニアメラ…死後九日目に行われるムニモシノ（註十七参照）。

十九 マカリア…①葬儀または法事の後に供されるパン。

②ネクロトラペゾ（註二十参照）。

二十 ネクロトラペゾ…葬儀の後、死者の家で近しい者たちだけで死者を偲んで摂る食事。

（協力…現代ギリシア語教室エリニカ有志）